



2018 年 (平成 30 年)
7 月号 (No. 878)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

平成30年度通常総会を開催 これまでの継続的な施策が結実し、 永年の課題であった黒字決算を実現

平成30年度通常総会が6月23日、東京・四谷の主婦会館プラザエフで開催された。会員112名が出席し、「平成29年度事業報告」「平成29年度決算報告」「平成30年度事業計画および収支予算」について審議し、いずれも原案どおり可決、承認された。平成26年度から継続的に実施してきた赤字解消のための様々な方策が結実し、念願の黒字決算を実現したことが大きな成果として報告された。

■小林政志会長挨拶 念願の黒字決算を実現

冒頭、小林政志会長より次のような挨拶があった。

「平成26年度より財政基盤強化のために様々な施策を実施してきた。平成29年度は永年会員の方たちからご寄付をいただく一方で、諸経費の削減の効果が出て、わずかで

はあるものの決算の黒字化を達成できた。ただし、これはゴールではなく、スタート地点。今後、コンプライアンスの徹底、ガバナンスの確立のため、各種規程の整備を進めて、時代に即した強固な組織を構築していきたい」

「昨年の総会后に、創立120周年に向けての記念事業準備委員会

目次

平成30年度通常総会を開催	
これまでの継続的な施策が結実し、 永年の課題であった黒字決算を実現	1
晴天の下、第72回ウェストン祭を開催	4
2018年度「徳本峠越えとウェストン祭」	6
第3回全国「山の日」フォーラムを開催	7
支部長が代わりました①	8
追悼 湯浅道男先生を偲ぶ	10
東西南北	11
活動報告 山行委員会	12
図書紹介	15
図書受入報告	16
新入会員	17
会務報告	18
ルーム日誌	18
会員異動	18
INFORMATION	19
編集後記	19

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10～20時
水・金……………13～20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10～18時

を発足させた。これまで取り組んできた会員増強、支部活性化も視野に入れながら、日本山岳会の将来の発展に寄与できる記念事業を行なっていきたいと考えている」

■平成29年度事業報告・決算報告

本年度の総会出席者は112名。委任状提出者は901名、議決権行使書提出者は2221名で、出席者と合わせて3234名となり、現在の総会員数4833名の過半数を上回っているため、総会は有効に成立することが確認されたのち、議案審議を開始した。

平成29年度事業報告は永田弘太郎総務担当常務理事より、同決算報告は古川研吾財務担当常務理事より、それぞれ説明があった。

「事業報告」安全登山の普及の一環として登山講習会、雪山天気予報

の充実、冬山登山指導事業の積極的な展開などの諸施策を進めた。「山の日」関連では、29年度は那須山麓で開催された第2回「山の日」記念全国大会の実施に協力するとともに、各支部で地元に着着した周知活動を行なった。

海外登山については、海外登山助成金の支援を受けた学生部のインド北西部・ザンスカール遠征隊がSharak Kangri (78峰)の初登頂に成功した。

一般登山者を対象とする登山教室は参加者も多く、継続的教室、短期的講習会など様々な形態のものがYOUTH CLUBおよび20以上の支部で実施されている。支部が直接運営し、人材育成を目指す登山学校も発足した。

2025年の創立120周年に

向けて、準備委員会を発足させて検討を開始した。

会員動向は、平成12年度のピーク以降、10年以上にわたって毎年100名程度減少していたが、直近5年間で鹵止めが掛かりつつあり、平成30年3月現在の会員数は4889名。本年度は155名の新入会員と準会員92名の入会があった。

【収支決算】平成29年度は、前年度までの大規模イベントの開催が一段落して、収入および支出とも大きく減少した。会員数の減少による会費収入の減少が続いているが、運営費を補う会員からの寄付金などの増加と減価償却費の減少によって、念願の黒字決算を実現できた。

経常収益合計は9728万円、対前年度比2901万円で、22・9%減少しているが、経常費用合計も9555万円となり、3875万円、28・8%減少した結果、経常利益は173万円の黒字となった。最終損益である当期利益も同額であり、改善額は対前年度比で974万円となった。

【収益の推移】会費・入会金については、準会員の増加が92名と3桁

に迫ったが、正会員は退会者と物故者が入会者を上回り、会員数の純減は94名。このため会員と準会員の受取り会費の合計額は5220万円となり、前年度比で0・5%の微減。会費と入会金の合計額についても5562万円で、1・7%の減少となった。

事業収益は、当年度より登山講習会収益を雑収益から事業収益へ表示変更したため、1801万円と前年度比で34・6%増加している。うち主な収益である年次晩餐会の参加料収入などは、昨年度とほぼ同額で推移している。

寄付金などは、当年度は会員寄付金、特に永年会員からの寄付(162名、281万円)と支部での募金などによる寄付金が増加したものの、こども夢基金からの助成金が減少したため、当年度は1718万円と対前年度比で630万円、26・9%の減少となった。

【事業費と管理費の推移】事業費は総額で9137万円となり、対前年度比3876万円、29・7%の減少となった。その主たる要因は、前年度までであった110周年記念事業とネパール大地震救援事業費の減少によるものである。

以上の報告があったのち、平井拓雄監事から、収支計算書などが正確かつ妥当であり、理事の業務執行が誠実に行なわれていたことを認める監査報告があった。会場からの質疑はなく、賛成多数で事業報告、決算報告は承認された。

■平成30年度事業計画・予算案

【事業計画】登山振興事業として、秩父宮記念山岳賞表彰事業、海外登山隊への助成事業、機関誌『山岳』ほか図書の刊行は従来どおりであるが、特に7年目となるYOUTH CLUB事業登山講習会の開催、冬山天気予報の配信および日・中・韓3国学生交流登山の実施などに注力する。

環境保全事業は、東京多摩における「高尾の森づくり事業」、東海地区の「猿投の森づくり事業」など全国11支部で実施されている森づくり事業を推進し、全国的な展開を目指す。

業務執行体制については、財政基盤確立のため、これまで会員増強と支部活性化に向けて様々な対策を講じてきた。今後は、一部の支部で取り組んでいる登山教室、会友制度などを視野に入れて、会員増強の検討を進める。また、支部運

営体制の充実のため、30年度には支部運営などの応援体制の一層の充実を図っていく。

【収支予算】この数年、会費収入の減少によって経常的な赤字を計上しているが、赤字解消のために数年前から様々な施策を実行しつつある。平成30年度はそれらの施策の効果が結実する年として、赤字解消を実現したい。なお、30年度予算の経常収支の見込みは4万円となり、ほぼ損益均衡のゼロベース予算となっている。「お友だち作戦」の実行に伴う会員数増加による収益改善と、継続的に行なっている費用削減効果が実現したことによる成果である。

■その他の報告事項

そのほか報告事項が3件あった。1つ目は斎陽広島支部長より、一昨年、昨年と続けて遭難事故を起こした広島支部の再生状況についての報告。

「昨年9月からすべての活動を停止して、連日にわたり事故原因の究明、報告書の作成を行なってきた。本部とも連携して広島支部再生委員会を設立し、今年4月の第6回再生委員会にて今後の組織作りの方向性がまとまり、同月の支



会場には全国から多くの会員が出席した

部総会の決議をもって再スタートを切った。5月からは支部が新たに定めた安全指針を胸に、会員の登山活動を再開している。今後は、会員増加だけでなく、指導者・リーダーの養成、新入会員への指導もしっかりと行なっていく」

2つ目の報告は、中山茂樹副会長より登山計画書の提出について。「広島支部の遭難事故を受けて、監督官庁である内閣府からの指導があり、当会全体としても遭難防止のためにならんかの対策を講じる必要に迫られた。そこで、これまでは本部遭難対策委員会への登

山計画書の提出は、支部山行と委員会山行のみだったが、個人山行も含めたすべての山行に関して計画書の提出をしていただくよう、遭難対策規程を改定した」

3つ目の報告は、重廣恒夫副会長より、昨年7月に設立した120周年記念事業準備委員会の進捗状況について。

「基本理念は温故知新。日本山岳会の歴史を振り返りつつ、新しい時代に相応した事業を推進していきたい。また、会員増強、支部活性化、安全登山推進につながる事業にすべきだと考えている」

■質疑・応答

坂井広志会員(8798) 登山計画書の提出が、安全登山や遭難防止のために必要であることは認識しているが、個人山行も含めてすべての山行で提出となると運用面での難しさはある。できるだけシンプルな運用体制を考えていただきたい。

吉井英生会員(15655) 日本山岳会のかつての海外登山はパイオニアワークが根底にあり、だからこそ社会の支援・理解も得られた。120周年記念事業のグレート・ヒマラヤ・トラバースも、日本

山岳会が行なうのであれば、社会的価値と結び付けていかなければならないのではないかと。

重廣副会長 公益事業として、人々がヒマラヤに関心や憧れを持ったり、かつてのパイオニアワークのように、1枚の地図や写真から登る山を探し出す登山も併せて行なっていきたいと考えている。

穂高健一会員(14244) 支部として山の日関連の記念事業を計画するが、日程などに関して県や市町村とうまく連携が取れない。日本山岳会として各自治体に働きかけて、山の日関連のイベントの整理・統合はできないものか。

小林会長 山の日関連の事業は、必ずしも8月11日に行なわなければならないというものではない。支部ごとにその地域に根を張った活動を展開していただきたい。

川俣俊一会員(5007) 財政状況の悪化要因のひとつとして、「会費免除の永年会員の増加」を挙げているが、永年会員が増えることは日本山岳会にとって誇るべきことであり、財政悪化の原因とされていることに違和感を覚える。

小林会長 永年会員は日本山岳会に貢献をされてきた方々。ただ、

当会は会費で運営されており、財務的な観点からのみ記載してしまつたため、そのような表現になつてしまつた。

塩澤厚会員(9086) 「YOUTH CLUB」によつて若手会員の入会が増えた」とあるが、各支部とYOUTH CLUBの関連は？

野澤副会長 YOUTH CLUBがあるのは本部および東海、広島、四国支部のみ。今後とも各支部に働き掛けて作っていきたい。

神崎忠男会員(6002) 登山計画書を提出しないと、何かペナルティがあるのか？

中山副会長 ありません。

神崎会員 安全登山や自然保護の施策は、各山岳団体がそれぞれ実施するのではなく、登山界全体で取り組んでいくべきだ。日本山岳会には、公益社団法人として安全登山や自然保護推進のリーダーシップを発揮して欲しい。

北原秀介会員(8267) 若手会員を勧誘したいが、入会金2万円がネックになっている。

小林会長 ぜひ準会員制度をご利用いただきたい。

(報告Ⅱ 谷山宏典、写真Ⅱ 吉富明)

REPORT

晴天の下、第72回ウエストン祭を開催

日本山岳会信濃支部

本年も6月第1日曜日の3日、上高地・ウエストン広場で第72回ウエストン祭が開催された。絶好の晴天に恵まれ、成功裏に終了することができた。

碑前祭の前日2日は、徳本峠越え記念山行。今年も松本市島々公民館前の広場で、早朝5時ごろから地元島々町会の皆様のご厚意により、出発式の会場が準備された。

支部員、一般登山者、山研委員会に参加を募った新入会員らも集まり出発式を行なう。米倉逸生信濃支部長の挨拶の後、今回の峠越え山行リーダーである松本潔会員の注意事項があり、準備体操ののち6時に出発。峠越え支部員は20名。恒例となっている安曇小学校の児童14名も保護者、職員らとともに登山に参加し、翌日の碑前祭にも参加予定となっている。

峠越え組を見送った後、事務局はひと足先に車で上高地へ。今年の本部は、ウエストン師も宿泊し、クライマーズブックを残した上高地ルミエスタホテル(旧清水屋)に

お世話になる。上高地到着後、バスターミナル、河童橋前で記念品販売。午後3時過ぎには峠越え組も三々五々到着し、やや遅れた会員がいたものの全員無事、徳本峠を越えることができた。

5時半から明日の碑前祭の打ち合わせを兼ねた懇親会。小林政志会長、森武昭前会長も同席され、米倉支部長、小林会長の挨拶の後、担当から明日の碑前祭の役割分担が示され、1年ぶりの再会を懐かしみながらの懇談。打合せ会出席者は42名。

3日は本番の碑前祭。今日も晴天に恵まれ、絶好のウエストン祭日和。記念品販売担当の会員は、早朝から昨日同様バスターミナル、河童橋前で店開き、9時から碑前祭の準備。支部員はほとんどが経験者で、横断幕、テントなど碑前の会場設営は円滑に進む。

■第1部

10時から碑前祭第1部が、角田啓蔵支部員の司会により始まる。最初に米倉支部長がまずウエス



主催者挨拶をする小林政志会長

トン師レリーフの設置、戦争による撤去、復元の経緯に触れ、「昭和22年の再設置から今年は72回目を迎えることができ、これも地元松本市をはじめ関係各位の協力によるものと感謝している。事故がないよう登山を楽しみ、上高地の自然を堪能していただきたい」と開会の挨拶があった。

続いて安曇小学校4年生の代表児童2名によるウエストン師への献花。同じく安曇小学校の4年から6年までの児童による「ウエストンを讃える歌」の献歌があり、山で亡くなられた方に、また、さらなる安全登山を祈念して黙祷を捧げた。

主催者である日本山岳会小林会長からも挨拶があり、「好天のなか昨日の記念山行に続き、ウエストン祭が開催できたことは、関係各位、諸先輩、信濃支部員のおかげと感謝申し上げたい。ウエストン師は登山の楽しさを教え、上高地をはじめ日本の山々を世界に紹介し、日本山岳会創設のきっかけをつくってくれた。山を通じて自然の素晴らしさを教えてくれた師に想いを馳せ、山の事故がないことを祈念したい」と述べた。

来賓を代表して松本市の坪田明男副市長は、「市としても登山道整備に政府関係機関や県と協力しながら取り組んでいる。古道を守る人々の努力もあって、徳本峠の道が守られていることに感謝したい」と話し、地元松本市の学校登山が減少していることなど最近の山事情にも触れながら、「1年の安全登山を祈念したい」との挨拶があった。

次に渡辺庸子支部員による、詩人・尾崎喜八が昭和44年の第23回ウエストン祭の数日前に書いた「山が待っている」という詩の朗読。続いて安曇小学校の児童によるリコーダー演奏「エーデルワイス」。

合唱「あの素晴らしい愛をもう一度」を会場の参加者も口ずさみながら第1部が終了した。指導は小林僚先生。

■第2部

第2部では、記念山行報告と記念講演があった。

昨日の徳本峠越え記念山行の様子を松本潔支部員が、信濃支部員や安曇小学校の児童をはじめ大勢の皆さんに参加いただいたこと、5月29日に、環境省中部山岳国立公園管理事務所ほか信濃支部員2名を含む総勢8団体、24名で登山道整備を行なったこと、危険箇所もなく、例年に比べ雪が少なく、体調不良になる者もなく無事に峠越えができたことを報告した。

続いて菊地俊朗氏による記念講演。菊地氏は山岳ジャーナリストで信濃支部会員でもあり、1964年、長野県山岳協会を中心とするネパール・ヒマラヤのギャチュン・カン全日本岳連登山隊に隊員として参加し、その遠征報道で同年の日本新聞協会賞を受賞されている。『山の社会学』（文藝春秋）など多数の著書がある。

演題は「地元目線の上高地」。大正時代から今日までの上高地の観

光客の推移や、霞沢水力発電所建設で上高地が開けてきたこと。戦国時代には武者の往来があり、早い時代から上高地は知られていた。江戸時代には柚人が大勢おり、木を切り出していた。牧場となっていた時期を経て、観光地としての現在の上高地になっている。上高地の課題は「砂防」。毎年多くの土砂が流出し、河床が上がっていることに對し、関係各位の努力により現状維持されているが、今後一層の対策が求められている等々、具体的な事例を挙げながらの分かりやすい話であった。上高地の歴史から今日の課題まで、約40分間、炎天下ではあったが大勢の参加者



上高地の今昔を講演された菊地俊朗氏

が興味深く聞くことができた。

以上で第2部も終わり、来年の再会を約束して、祭典を終了した。

■午餐会

この後は会場を上高地温泉ホテルに移し、午餐会。来賓の方々と交え、参加者全員で互いの労をねぎらった。米倉支部長から「古道徳本峠道を守る人々」代表・高山良則氏はじめメンバーが紹介され、峠道の維持にご尽力いただいていることに感謝を申し上げた。

REPORT

2018年度「徳本峠越えとウェストン祭」

大槻利行

毎年6月第1週末の恒例となっている、新入会員向け企画「徳本峠越えとウェストン祭」が開催された。これは新入会員に山岳研究所を知ってもらい、日本山岳会創立を助言されたウオルター・ウェストン師に想いを馳せていただくのが趣旨。山岳研究所運営委員会により計画され、島々谷の道をたどって上高地に至る、仲間づくりの山旅である。

6月2日(土)午前5時過ぎ、島々公民館前に第72回ウェストン祭を

〈出席の来賓の皆様〉 松本市副市長・坪田明男様、環境省中部山岳国立公園管理事務所長・中野圭一様、林野庁中信森林管理署総括管理官・松田恵様、国土交通省松本砂防事務所長・石田孝司様、上高地町会長・上條敏昭様、上高地観光旅館組合長・奥原幸様、一般財団法人自然公園財団上高地支部所長・加藤銀次郎様
(信濃支部ウェストン祭実行委員長・青木保良)

主管する信濃支部の皆さんや地元町会の皆さんにより出発準備が進められ、三々五々参加者が集合した。天気は上々、山の冷気で眠気も吹き飛ぶ。

全員で出発式と準備体操を行なったのち、6時過ぎ、東海、静岡、関西、千葉、神奈川の各支部からの参加者と委員会スタッフ合わせて21名の大パーティで歩き出す。途中休憩を一度挟みつつ、2時間ほどで二俣となる。明日のウェストン祭に参加する地元安曇小・中

学校のパーティも元氣いっぱい。
ここからが本格的な山道だ。サ
ブリーダーをトップ、チーフリー
ダーがラストの陣容で、スタッフ
がメンバー間に入りそろりと歩き
出す。島々谷南沢の右岸から左岸
へ、そして再び右岸へと、初夏の
清流を愛でながら歩を進める。沢
沿いの水平歩道であるが、路肩が
弱い所もあり、足の置き場は慎重
に選んで歩く。

そろそろ疲れを感じるころ、右



島々谷南沢の右岸を進む。二俣と岩魚止小屋の中間にて

岸から左岸にしっかりとした橋を
渡ると、岩魚止小屋に到着。

出発から5時間経過の11時だ。
昼食タイムを30分間とする。食事
をとり少しリラックスするが、こ
こから徳本峠までの3時間ががん
ばり所だ。小屋脇のカツラの大木
前に全員整列、記念撮影を済ませ
出発する。

道は枝沢を越し、本流を左岸、右
岸、再び右岸と渡りつつ進む。毎
年の増水や雪、土砂崩れで道や橋

に起こる損傷を、地元
の「守る人々」が手入れ
をしてくださっている。
数年前に新たに付けら
れたルートは、草木も
茂るしつかりとした道
になり、通過に緊張し
た丸太橋が立派な橋に
架け替わっている。道
普請に関わられた皆々
様に心よりの感謝を申
し上げつつ「力水」の水
場に到着。昨年はここ
を通過してしまったた
め、後々メンバーに怒
られた。今年是一本立
て、交代で山の清水を
口に含む。うまい！

ラストの九十九折をそろそろと
登っていく。振り返ると谷対岸の
尾根が目の高さだ。高度は上がっ
ている。もう少しだ。例年は峠直
下に残雪が出てきて「もう少しで
峠」の目印にしていたが、今年は雪
がない。先に峠に到着している子
どもたちの歓声を励みに、ラスト
を登る。14時過ぎ、徳本峠着。徳
本峠小屋の振る舞いの豚汁をいた
だく。五臓六腑に染み渡るとはこ
のこと。子どもたちだけでなく、引
率の先生方もお代わりしている。

峠の展望台から山研にはかろう
じて携帯電話が届く。パーティの
状況と到着予定時間を確認すると、
峠の反対側、明神や穂高を正面に
下山開始。こちらも残雪はなく、夏
道を忠実にたどって明神、そして
上高地に至り、山旅を終えた。

翌3日(日)、楽しかった山研での
夕食懇親会の余韻を残しながら新
たな朝を迎え、朝食後は周囲の散
策を個々に楽しむ。そして、10時
からは多くの人々に交わり、ウェ
ストン祭に参列した。

強い日差しの下であつたが、徳
本峠越えの仲間となった安曇小・
中学校児童の合唱、縦笛の演奏、菊
地俊朗氏による上高地今昔の貴重

な講演を伺う。峠越えの疲労感
あつたが、心は澄み頭も冴え、満
足な2日間の山旅となった。

■お知らせ 山研のトイレをすべ
てウォシュレット便座に

山研のトイレは地下と2階に設
置されていますが、昨年のウェス
トン祭のときに一部、ウォシュレ
ット便座に取り替えておきました。
今回、ウェストン祭の前日に、委
員自らの手で残りの便座のすべて
をウォシュレット便座に取り替え
ました。会員へのサービス向上に
つながれば、と思っています。

(山岳研究所運営委員会)

REPORT

第3回全国「山の日」フォーラムを開催

今年で3回目となる全国「山の日」フォーラムが6月9日と10日の両日、東京・秋葉原のUDXシアターで開催された。全国山の日協議会、環境省、文部科学省、スポーツ庁、警察庁などの実行委員会が主催した。

シンポジウム、トークショーの6部構成で、1日目は第1部「山の日」を通じて山の国立公園の可能性を探る／地域・行政・アウトドア事業者・メディアの取組み報告 第2部「山と自然／森林・河川から地域振興を探る 第3部「山と自然／たくましい子どもたちを育む、がテーマ。

行政と地域密着対応の今

これらのテーマに環境省の国立公園利用推進室・西村学室長をはじめ、8月の「山の日」記念全国大会の開催地・鳥取県の緑豊かな自然課・池内富久課長、奈良県吉野町教育委員会の橋元美穂さん、山好きなお子とも育てに意欲を見せる松本市の坪田明男副市長らが、それぞれの立場から現状を報告し、

問題点を指摘した。

1日目の締めくくりは、映像作品『フナリ大滑降』を企画した、国際山岳ガイドでスキーヤーの佐々木大輔さんのスペシャル・トーク。スリリングな映像を見ながら、子どもたちにも自然の脅威と恵みを伝えよう、と訴えた。

自己責任と危機管理能力

フォーラムの2日目。第4部のテーマは山の安全と山岳救助。

長野県警の宮崎茂男航空隊長が、谷筋に迷い込み、身動きできなくなった2人連れをヘリで救助するまでを緊迫感あふれる映像で紹介し、遭難防止を呼び掛けた。

このコーナーでは、最先端の遭難対策として電波の送受信で瞬時に遭難者の位置が確認できるシステムや、登山計画の作成・登録・情報の共有で安全を確保し、無事に下山するまでをフォローするコンパス・システムが紹介された。

当会の会員で、国際山岳ガイドの近藤謙司さんの講座『登山者の自己責任と危機管理能力』は、そ

のまま役立つ実践論だった。危険を予知する能力、チャレンジする意欲と安全範囲内での行動、経験を積み重ね自分の限界をわきまえることの大切さ……。大勢の若い人たちに聴いてもらいたい内容。

持続的な地域振興と人材活性

第5部は「山の日」記念全国大会の開催県からの報告。第1回の長野、2日目の栃木に続き、今年鳥取と来年の山梨からは、開催の狙いと準備状況の説明があった。全国大会開催を地域振興に結び付け、「山に親しみ、恩恵に感謝する」という理念をいかにして県民、次世代、全国に広げていくか。その取り組みについて報告があった。



1日目第3部のシンポジウムは、子どもたちがテーマ

ロングトレイルのすすめ

第6部は日本ロングトレイル協会の中村達代表理事が基調トーク。健康と自然志向へのライフスタイルの変化で、「歩く」から「歩く旅」へ参加者の意識が進化しているという現状を分析し、周辺環境も整いつつある、と報告した。次いで鳥取県から山陰海岸ジオパークと大山での取り組み、長野県からは信越トレイルについて報告され、安藤スポーツ・食文化スポーツ財団の荒金善一さんが、トレイル標識の整備と設置基準の全国的なスタンダード化が必要だ、と訴えた。

*

2日間にわたるフォーラムの参加者は、6つのパートを合わせて約600人だった。用意された席が半分も埋まらなかったのは寂しい。内容は多岐にわたり、講演者パネリストも充実しているのに、である。プログラムが多岐にわたることで専門性が増し、一般の関心が薄かったのか。並行して催された関連企業の展示会が、今回はなかったことが響いたか。PR不足もあるう。いずれにせよ次回に課題を残した。

(「山の日」事業委員会・成川隆顕)

支部長が代わりました①

秋田支部 鈴木裕子さん

長年、支部事務局を担当していたことから、第7代秋田支部長の任を仰せつかりました。

山歴も浅く、登山技術も未熟な私ですが、幸いにも山歴豊かで実力のある先輩会員の方々がおられますので、皆さんのお力添えを得て、支部運営を進めてまいります。

私が支部に入会したのは、平成4年10月、韓国・智異山と秋田・太平山が世界初の姉妹山締結をし、その1周年記念行事として行なわれた韓国山岳会慶南支部との交流登山で、智異山登山に参加したことがきっかけでした。

その後、先輩会員とともに県内の藪山や残雪期の山々、また、台湾や韓国の山々を登り歩きました。初心者で登山技術の未熟な私は、先輩会員の手枷足枷になっていた



秋田支部長 鈴木裕子さん

と思いますが、当時を思い返して感謝しています。

秋田支部は、来年度に設立60周年を迎えます。設立会員はじめ、これまで諸先輩が築いてきた長い歴史と伝統のある秋田支部の体面を汚すことがないよう、支部運営に邁進し、先輩会員に喜んでいただける記念行事にしたいと思っています。

私は、支部の活性化は、会員の多くの方々が支部行事に参加することだと思っています。総会はじめ春秋の支部山行、新年会、そして、公益目的事業の太平山市民登山や歩道整備などがあります。また、当会会員が参加できる全国支部懇談会、東北・北海道地区集會、年次晩餐会、晩餐会記念山行があります。さらに本部山行委員会が計画する、大きな山へも登ることができます。それらの集會に参加して、他支部の方々との交流を深めることが支部の活性化につながると思います。

秋田支部会員の高齢化、平均年齢の高さなどの問題を含みながらも、秋田支部でできること、身の丈、身の幅に合った事業を、会員の方々とともに、精一杯頑張りたいと思っています。

福島支部 佐藤一夫さん

昨年の12月7日に70周年を迎えた、伝統ある福島支部の6代目支部長を仰せつかった佐藤一夫です。職場の先輩に誘われて登った鳥海山に魅せられて、以後、山にのめり込むようになりました。

JACへは36歳のときに入会させていただきましたので、はや35年になります。偶然にも福島支部の誕生日が私と4日違いであったことから、支部に対してはこのほか親近感を抱いていました。ところが、転勤が多かったサラリーマン時代は、クラブ活動にはほとんど参加できず、個人山行を主に楽しんでいました。

その反動もあつてか、定年後の60過ぎには、ほとんどのクラブ活動に参加させていただき、さらに事務局(会計担当)や副支部長を仰せつかり、諸先輩たちとの山行は



福島支部長 佐藤一夫さん

もとより、『70周年記念誌』の編纂に関わることができ、良い経験をさせていただきました。

記念誌に投稿された随想を拝見すると、支部創立に至った経緯や創立総会の様子、交通の不便な時代に苦勞して登った山行記録の数々など、大いに興味をそそられました。

学生時代に年間150日近く山に入っていた方、植村直己氏の後輩で、同氏と一緒に登山をされた方、山のテレビ番組でガイドを務めた方、中国・王毅外相(当時の駐日大使)を磐梯山に案内された方、日本百名山を完登された方等々、貴重な体験をされている方々を知ることができ、豊富な人材を抱えるJACの素晴らしさを、改めて認識することができました。

今後の福島支部の課題は、ほかの支部と同じく会員の高齢化問題と、将来を担う若手会員の確保にあります。妙案がないだけに責任の重さを感じますが、会員の英知を集め、新たな歴史を築いていきたいと思っています。

支部長が代わりました①

東京多摩支部 野口いづみさん

東京多摩支部は300名を超える大所帯で、支部長に選任していただく、身の引き締まる思いです。私は本部の理事を4期8年務め、支部では登山教室の講師やスタッフを担当していました。今後は支部長としての職務に努め、皆様の期待に応えたいと思います。

山歴は高校時代からで、大学でも続けました。40歳ごろから海外登山に目覚めて30座ほど登り、2009年に日・中・韓3国学生交流登山で玉珠峰に登頂しました。JACには、1995年にワスカランに登ったのを契機に入会しました。現在は、主に国内で山スキーや沢登りなどを楽しみ、昨年、日本百名山を達成しました。

本部委員会は医療、科学、YOUTH CLUBの各委員会に属



東京多摩支部長 野口いづみさん

しています。山の医療講演会の講師をし、科学委員会作成のマナーノートのイラストを描きました。

支部活動の基本方針は、安全第一と考えます。今まで大きな事故がなかったのは、会員の努力の賜物です。これからも慎重、安全な登山を重ねたいと考えています。他方、萎縮することなく、チャレンジ精神を持って充実した登山をしてほしいと思います。会員間のハーマニーも大切で、会員には楽しく活発な山行と、活動をエンジョイされることを願っています。

支部は毎年、会員が増加しています。課題は、活動の一層の活性化、会員数の増加、会員の若返り、女性の活躍などです。そのために、各種登山教室や山行、講演会の一層の充実を図ることが重要です。魅力的な行事を実施することが、入会促進と会員のグレードアップにつながると思います。

また、女性会員の占める割合は設立当初は1割程度でしたが、現在は3割です。元気なウーマンパワーの活躍を大いに期待しています。プロジェクトとしては、来年の設立10周年記念イベントの実施などに努めたいと思っています。

富山支部 鍛冶哲郎さん

私の山歴は、小学3年生のときに父に連れられて登った立山に始まります。高校の学校登山では剣岳の岩場に震えましたが、山は一層好きになりました。大学ではWV部だったので、岩登りは初心者ですが、高校生のころに映画で見たG・レヴィュファの芸術的な登攀は、今も私の山登りの手本です。

JACには、24年前、福井支部長だった故宮本数男さんの推薦で入りました。全国組織のJACは、私のような転勤族が赴く先々で山に登るには最適だと思ったからです。福井では福井支部の方々とたくさん山の山に登りました。富山支部には5年ほど前、仕事を辞めて黒部市に戻ったのを機に入りました。

この3月に創設70周年を迎えた富山支部は、立山、剣岳をホームグラウンドとし、海外遠征や人材



富山支部長 鍛冶哲郎さん

の輩出に輝かしい過去があります。しかし、会員の高齢化はご多分に漏れず、管財人になった心境です。JACの高齢化については、『日本山岳会百年史』ですでに指摘されていますが、これは世の趨勢であり、JACが、その名称も含めて生まれ変わらない限り、打つ手はないと思っています。

とはいえ、私もその一人ですが、団塊世代が山から姿を消すころには、日本の山岳界やJACの様相も、かなり変化しているでしょう。富山支部としては、山登りと交流を核とし、傍目にも楽しげな活動が続けて次の世代に引き継いでいく所存です。ついては、他支部の取り組みも参考にしなく、よろしくお願いいたします。

世の中が便利になった半面、山登りがつまらないものになってしまいました。しかし、例えばペテガリ岳のように、奥地まで延びた林道により、一時は百名山的な登山の対象となっていた山が、その後、災害や維持管理費の削減で林道が閉鎖され、昔に戻った山が各地で増えつつあります。そんな山々を跋渉するのは若者の特権であり、将来の山岳界には朗報です。

追

OBITUARY

悼

湯浅道男先生を偲ぶ

東海支部長 高橋玲司

「良くやった、ありがとう。みんなの成果だ！」

1989年、愛知学院大学シシヤパンマ登山隊のベースキャンプで、トランシーバを片手に泣き叫ぶ、登山隊長を務められた湯浅道男先生の姿が忘れられない。

これが湯浅先生のすべてであろう。自身のことより仲間を愛し、仲間を育て、仲間以上に感動する、涙もろくも人情味あふれる姿が、

湯浅先生である。

私にとって「先生」とは、湯浅先生ただ一人である。今までもこれから、である。高校時代に尾崎隆さんの本を読んで感銘を受け、数ある大学から先生を師と仰ぎたくて、愛知学院大学山岳部の門を叩いたことを思い出す。

先生は「人間の能力には差は全くない。愛知学院だからって引け目と思うな。おれたちは日本一の山岳部であり、プライドと自信を持つて行動しろ」そう先生から何度言われたことであろうか。



湯浅 道男(ゆあさ・みちお)

会員番号6214

1937年 千葉県生まれ。法学博士、元愛知学院大学法学部教授。
1963年 ドリュ北壁(第2次RCC隊)
1968年 コー・イ・バンダコール登頂
1977年 ブロード・ピーク第2登
1989年 シシヤパンマ登頂
1994年 エベレスト・サウスピラー登頂。
以上すべて愛知学院大学隊隊長。
1973年 エベレスト南西壁(第2次RCC隊登攀隊長)
1984年 ガウリジャンカル南峰初登頂(JAC東海支部隊長)
1988年 チョモランマ登頂(日・中・ネ3国合同登山隊南側隊長)
2018年4月13日 永眠、享年81

学生時代は、先生の独特の持論の下に徹底的に鍛えられ、何より人としての生き方を熱く語られ、人間味をむき出しにして育てていただいたことが忘れられない。何度叱られたであろうか。そして、何度考えさせられたであろうか。しかし次の瞬間、さらには翌日、にこりと笑われると、その叱られた意味が理解できるのである。

先生は現在の国登研(国立登山研修所)の設立にも尽力され、当時、一匹狼的な精鋭クライマーたちを束ね、登山界の発展のための指導者を育成し、現在の日本の登山技術の向上と平準化に大きく寄与された。また、山岳ガイド協会の設立など、現在のプロガイドの礎を作ったことも知られている。

先生の登山歴はご存じのとおり、第2次RCCの一員としてのドリユ北壁日本人初登などクライマーとしての実績もあるが、特にエベレストの隊長を3回も務められたのが特筆されよう。また、東海支部でもガウリジャンカールの成功など、数々の遠征を通してヒマラヤニストを育て、多大な功績を残してくださった。自身のことではなく、隊を通して人を育て、隊を

成功裏に導く手腕は、生まれつきの資質であろう。

晩年の先生自身の山登りは非常に穏やかで、楽しくのんびりした山登りをされていた。ときには夜遅くまで若者に囲まれ、その後に夜を明かして仕事をされるなど、激務のせいでいつも疲れておられる様子であった。それでも皆に囲まれながら談笑し、暇を見付けは山にも登られていた。

先生の残された功績、それは何より人を育てられたことである。それを知っている者一人一人の心にそのことがしつかり刻まれており、先生とお会いしたころの先生と同じ年齢に近づくと、つくづく感じるのである。先生の生き様を見てみると、改めて自分自身の未熟さを知る思いである。今もきつと黄泉の国から我々をじつと見つめ、はらはらしながら一喜一憂させていることであろう。これから、先生から受けた教えや御恩を胸に、先生に恥じない生き方をしなければならぬと誓い、このことを御霊に捧げるものである。

先生、本当にありがとうございます。どうか、どうぞ、安らかに眠りください。

東北 西南

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

『シュラーギントワイトアトラス』を巡る旅を終えて

小原茂延

2017年の年次晩餐会で念願

の『シュラーギントワイト アトラス』の展示を実現することができた。これを機に、『アトラスおよびテキスト』の所蔵先として知られる6ヶ所、すなわち東北大学附属図書館、国立国会図書館、東洋文庫、信州大学附属図書館、京都大学附属図書館、そして日本山岳会所蔵分について、調査確認することをお願い立った。これは、『山岳』103年（2008年）に薬師義美会員が発表されて10年になること、また、同会員より比較調査の意義あることを教示されたことによるものでもあった。

各所蔵先には事前に、外部者と

して閲覧する場合の必要書類、貴重書閲覧に対する別途書類、あるいは資料撮影の是非等々で担当司書の方とメールをやり取りして、齟齬の生じないよう留意したが、いずれの図書館などでも懇切な対応を受けることができた。

さて、『アトラス』の体裁、構成は薬師義美さんの調査・論考によると4分冊が基本のようであるが、その形式を取っているのは、京都大および東北大附属図書館のものであった。収納は表題を黒文字で印刷された厚表紙を上下、右側2ヶ所の紐で留められている。繊維の経年劣化で切れている箇所も散見された。

また、石版画の保存状態は両者ともにあまり良い状態ではなく、汚れ、シミがやや多く、下部の何枚かには捲れがある。このことから、年代的にほかの4収蔵先より古いように思われた。

信州大附属図書館および国会図書館、東洋文庫並びに当会所蔵の『アトラス』は、分冊ではなく1冊として製本あるいは収納といった製本である。信州大の表紙は臙脂色の革装で金文字の美麗なものであり、深田久弥旧蔵の国会図書館のものは、青緑色に金文字の深みのある表紙で、右下隅に160の数字が手書きでなく付されているが、その意味するところは不明である。完全に1冊として前44葉が切り離せずに製本されている。東洋文庫所蔵に係るものの表紙はなんの変哲もない茶表紙で、それも均一でなく濃淡二色で、文字は一字もないので、やや呆気にとられたが、見返しの左側に一般的な黒文字の表紙が付いていた。

そのほかに分冊だったなごりの表紙らしき紙が介在していたのは、4分冊を1冊に合本したものととも考えられる。また、旧蔵のモリスン文庫独特の蔵書票（目の出、カンガルー、オームの図案）が数ヶ所見受けられたのが印象に残る。日本山岳会が所蔵する（かつて木暮理太郎第3代会長寄贈のものは戦災で焼失）現在の『アトラス』は、松崎中正会員から創立100周年に際

し寄贈されたものであることはすでにご存知であろう。この表紙は薄い青白色に黒い文字で表題が印刷されているもので、京大、東北大の体裁と同様であるが、帙状の箱に44葉がバラで収納されている。その点では信州大所蔵のタイプと同様である。

最後にエディシヨン・ナンバーについて触れる。当会所蔵の『アトラス』中にパラフィン紙のようなものにペン書きされた18/289があった（前掲『山岳』103年）とされる。東北大所蔵のものにもパラフィン紙の挿入があったが、数字記載はなかった。図書委員会、旧蔵者などの関係者にも尋ねたが定かではなかった。資料映像委員会が管理することになって、1枚1枚入念に取り出してリストを作成したのであるが、その存在を目になかった。通常エディシヨン・ナンバーは作品ごとに版画下部に鉛筆で手書きされ、その数字は分母が限定数を示し、分子はその何枚目に当たるかを表している。ただ、その歴史を遡ると19世紀の後半ごろからと言われていること、また、出版目的が学術調査の報告書の副本的図版集であるというこ

とから、単一の番号が付されたの
みと思われる。なお、版画の摺り番
号の少ないものに価値があると思
われているが、そのようなことは
なく、すべて同じ評価鑑定である
ことなどを斟酌すれば、おのずと
見えてくるものがある（版画美術
館ヒアリング、ほかの資料による）。

今回、所蔵先の各地を訪ねる旅
は、雪の仙台に始まり、早春の東
京、桜花爛漫の信州松本、さらに

走り、梅雨の京都を訪ねて終わっ
たが、本質的には「訪ねる行脚」が
東西南北にわたり、「シユラーギ
ントワイト アトラス」という古
典籍が幾星霜を経て各所に現存し、
リトグラフのすばらしい画像を今
に伝えてくれていることに感動を
覚えた。また、諸処でお会いした、
主として司書の方々の専門職とし
ての見識、心根に敬服、感謝した
次第である。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

山行委員会

四国八十八ヶ所歩き遍路③ 一国巡り伊予の国（菩提の 道場）に参加して

3月21日、午前10時40分、四万
十市・市野瀬バス停に、お遍路9
名が集結。強風と雨が吹き荒れる
なか真念の遍路道をたどり、39番
延光寺から64番前神寺までを巡る
お遍路を開始した。翌日からは快

晴が続く。

3月22日、39番延光寺から土佐
と伊予の国境、松尾峠を越える。急
な山道を登り、峠で眼下に広がる
宿毛湾の景観に皆歓声を上げる。
大師堂があり、宿泊可能。国境の
表示石が置かれ、多いときで1日
300人が行き来したとあり、に
ぎやかな当時間が偲ばれる。40番観
自在寺のお参り。今日の宿、山代
屋では夕食に40cmはありそうなタ

イがドーンと載った鯛ソーメンを
堪能した。

3月23日、桜満開の川岸を進み、
山道に入り急登の柳水大師、峠の
清水大師を経て大畑旅館に泊まる。
柳水大師のあずまやに77歳の先達
が1人、テント泊まり。55歳から
始めた歩き遍路は25回。ただただ
驚愕。

3月24日、宇和島市別格6番
龍光院と41番龍光寺のお参り。松
尾トンネルを迂回、宇和島城を左
手に眺める。龍光寺では若いスィ
ス人女性が自転車でお遍路。外国
人のお遍路が多いのに驚く。民宿
みまに5名と、民宿とうべやに4
名の分宿となる。

3月25日、42番仏木寺、43番明
石寺のお参り。崖崩れのある急登
の長嶺峠を越えて明石寺へ。途中、
蒲鉾店で宇和島名物じゃこ天のお
接待。続いて鳥坂峠を越えて大洲
城を眺め、五月人形の鎧・兜が飾
られたときわ旅館にたどり着く。
11時間の歩き。重い荷物を軽くす
るため、余分な物を宅配便で自宅
に送った人もいた。

3月26日、別格8番十夜ヶ橋は、
修行僧の空海が橋の下で泊まった
との言い伝えがあり、お遍路さん

は橋の上では「金剛杖を突かない
こと」とされている。内子の町は古
い街並みが整備され、内子座では
『勧進帳』、『助六』などの歌舞伎が
演じられている。

3月27日、44番大寶寺、45番岩
屋寺のお参り。農祖峠入口手前で
足の不調により1名離脱。お遍路
中、標高の最も高い久万高原を越
えて久万町へ。商店街はお雛様で
あふれる。急登の山道八丁坂を越
えて岩屋寺を往復。修行僧が修行
したのであろう割れ行場や、不動明
王が祭られた垂直の崖が霊場の雰
囲気を醸し出す。

3月28日、第46番浄瑠璃寺、47
番八坂寺、別格8番文殊院のお参
り。三坂峠を越え、坂本屋でお茶
とミカンのお接待を受け、浄瑠璃
寺前の長珍屋に泊まる。三坂峠は
松山側から越えると長い登りとな
り、当時のお遍路の苦行を実感し
た。長珍屋の食堂には胎蔵界と金
剛界の大きな曼荼羅が掲げてあり、
初めてのお客は異様な雰囲気戸
惑う。

3月29日、松山市に入ると松山
城が遠望され、お参りするお寺の
数が増えた。第48番西林寺、第49
番浄土寺、第50番繁多寺、第51番

石手寺、第52番太山寺、第53番円明寺のお参り。桜満開の新石手公園で花見を兼ねた昼食。道後温泉の前を通る。26年前に訪れたときの懐かしさより、歩き遍路で再び訪れたことの意外性に驚いた。宿泊する国際ホテル松山では鯛めし、ステーキ、刺身の夕食に満足する。食後、道後温泉に浸かりに行ったお遍路さんもいた。

3月30日、松山市を出て海岸線を進み、大西町のますや旅館に泊まる。県道347号に沿って堀江湾の青い海原に浮かぶ船の景色を眺めながら黙々と進む。遍路道は二十数年前に仕事で訪れた太陽石油菊間製油所の前を通っており、お遍路で訪れた記念に写真を撮る。海岸からは、しまなみ海道の島々をつなぐ橋や造船所のクレーンが遠望できた。

3月31日、第54番延命寺、第55番南光坊、第56番泰山寺、第57番栄福寺、第58番仙遊寺のお参り。仙遊寺宿坊泊。山の上の仙遊寺は急傾斜の参道で、大王製紙創業者が寄贈した立派な手すりが設置されていた。3代目の孫と人徳の大違いに頭が下がる。宿坊の玄関には住職作の奥様のブロンズ像、食堂

には動物のブロンズ像が置かれている。2階広間の窓から西日本最高峰・石鎚山と西条市街が遠望できた。夕食は地元で採れた精進料理をいただく。

4月1日、第59番国分寺、第62番宝寿寺、第61番香園寺のお参り。早朝、仙遊寺住職の勤行、法話を聞く。3年前に奥様を亡くされ遺影が本堂に飾られていた。亡くなつて初めて分かる奥様のありがたさと悲しみ、空海が弟子を亡くした悲しみ、一日一生の思いで生きる話に思わず目頭が熱くなった。地元の方からつきたてのきなこ餅、あんこ餅のお接待をいただいた。第61番香園寺は近代的な建物で、外観からはお寺に見えない。

4月2日、第60番横峰寺、第63番吉祥寺、第64番前神寺のお参り。横峰寺は役の行者が開祖と言われ、奥深い山の中にある。お参りするだけでも山道往復20kmもあり、ミツバツツジの花に癒されたが、話に聞いたとおりの大変な所だった。満開の桜を愛でながらの伊予路遍路を、伊予西条駅で解散した。総距離331.7km。そこで一句「春の陽を背に受け進む影遍路」。

(東京多摩支部・遠藤興志郎)

山行委員会

黒部の新緑と温泉を楽しむ会に参加して

今回、山行委員会企画されたのは「黒部の新緑と温泉を楽しむ会」と銘打った山行で、ときにはゆつくりとした登山を行なうとともに、新緑・山菜・温泉を楽しむ、というものであった。

それに賛同して参加したのは男性6名(平均年齢77歳)、女性4名(同67歳)。若いときに無茶をやつた人たちも人の子、それ相応にゆつたりした山行も欲しいという気持ちになるものである。

6月19日、降り立った新幹線・黒部宇奈月温泉駅は快晴で、明日から雨という予報に似つかわしくない良い天気であった。総勢10名が黒部溪谷鉄道宇奈月駅に集合して、そのままトロッコ列車で樺平駅へ進行。車窓からは豪雪のなごりの雪渓が残るなか、自己主張を始めた新緑が滴るように広がっている。

樺平で明日からの雨を考えて、早々に集合写真。ゆつくりした後、祖母谷温泉へと向かった。本流を離れて進む祖母谷の水量は、白馬

連峰に源を発するだけに思いのほか多い。雪渓の豊かな沢筋、張り出した稜線を越えるためのトンネル、険しい岩壁を彫り込んで造つた道など、変化に富んだ溪谷を進んで行く。手前の山に遮られて3000m級の稜線は望むべくもない。大きな沢筋でカモシカかシカの、ほぼ白骨化した死体が道横にばらばらになって転がっていた。おそらく雪崩に巻き込まれてここまで落ちてきたのだろう

長いトンネルを抜けると、急に視界が開けて対岸に木造平屋建ての祖母谷温泉が見えてくる。か

寄付金及び助成金などの受入報告

(平成30年5月31日まで)

寄付者など	受入金額など (単位千円)	寄付の目的、 その他
匿名	1,000	東海支部の 若年会員育成
古野 淳 会員	30	神奈川支部運営
日本テレビ放送網(株) 田中 芳樹 様	30	120周年記念 事業費

すかに硫黄の臭いが漂って温泉への期待が広がる。空には綿のような雲が広がり出したが、まだ雨の降る気配はない。

今日はここまで。午後4時を回っていたので、露天風呂に浸かり、アルコールも入って山談義などに盛り上がったことは言うまでもない。期待の夕食は色とりどりの小皿が食卓の上にお花畑のように並び、アツと驚いた。特に焼いたネマガリダケは本当に美味であった。祖母谷温泉を「ばばだに」と正確に言える人は、岳人をおいてあまりいないだろう。宿にある説明

板には、爺の女狂いに嫉妬した老婆から逃れるため、爺が麓から鬼岳の方へと逃げ込んだ。後を追ってきた老婆が沢を1つ間違えて祖母谷温泉近くで息絶えた。ここに老婆の怨念のように熱湯が噴き出した、と伝えられているのとこの。いつの時代にも男は罪深いものじゃて。

夜、とうとう豪雨が降り出し、清冽な水が流れていた祖母谷には濁流が渦巻いている。今日20日は、志合谷付近まで足を延ばす予定であったが、樺平まで戻ると水平歩道は豪雨のため通行止めとなっていた。ここは安全第一、急遽、猿飛峡を訪問して黒薙温泉に足を向けることとなった。樺平から20分ほどだが結構アップダウンが多く、冬期歩道や滑りやすい所もあって気が抜けない。黒部川に近い岩壁をへつるので、降水時の濁流の勢いは見るべきものがある。やはり日本の奇観の一つであろう。

猿飛峡から再び樺平に戻り、トロッコ列車で黒薙駅に降り立って黒薙温泉を目指す。雨は小やみになったが、上がる兆しはない。黒薙駅の線路から急な階段を上がつて水平な歩道を10分ほど歩き、再

び河原へと下る。歩道は右側が切れ、100mほど真下に激流が流れていて気が抜けない。

黒薙温泉は江戸時代初期の開湯で、露天風呂の敷石は直径5〜60cmほどの黒部川の天然石を割って滑らかに磨かれている。表面は濃淡色々な青色を呈しており、湯が透明なので非常に引き立つ。湯量は宇奈月温泉のすべてを賄って余りあるという。たつぷり時間があるので、皆1つの内湯と2つの露天風呂のはしごを何回も楽しんだ。夕食は海山の洗練された料理で、特にイワナの塩焼き、昆布締め、刺身、昆布巻きのかまぼこ、ホタルイカの酢味噌かけなど、秘境とはいえ富山の名物が数多く食卓に盛りされている。山男でもある支配人の温泉由来の説明や、どこか懐かしさの漂う当地の山の歌の披露に沸いた。

丸1日半降り続いた雨も翌21日、黒薙温泉を出てトロッコ列車に向かうころにはやみ、雲間からは再び陽光が緑を通して降り注ぎ、暖かさが戻ってきた。帰りは富山地方鉄道駅で解散となり、富山で遊んで帰る人、そのまま新幹線で帰る人、飯山で遊ぶ人、それぞれ目

的に別に三々五々分かれていった。

今回は一昨年、昨年と催行された山行委員会主催の厳しい奥駈けとはひと味違って、大したアルパイトもなく楽しく過ごした3日間であった。当会会員も、20代から80代まで活動年齢が広がって、厳しい山行にはついていけない老年会員が疎外感を抱くケースもあるうかと思うが、このような無理のない企画が散りばめられたならば、体力に見合った山行を楽しめ、事故の軽減につながる、健康寿命の延長に資するのではないかと考えるものである。

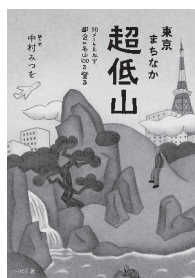
(小林義亮)



図書紹介

中村みつを著

東京まちなか超低山
50メートル以下、都会の名山
100を登る



2018年3月
べりかん社
A5判 128頁
1800円+税

子どものころ、何度か東京の品川神社境内にある「品川富士」（標高差約7m）に登り、こんなに面白い遊び場があるものかと思った。坂ある所にワクワクあり。私の山好きはここから始まったのかも知れない。品川富士は、富士山に登りたくても登れない江戸庶民が造ったミニチュアの富士山（富士塚）の1つで、富士塚は、関東地方を中心に300以上現存しているという。

本書は、東京の街中の、標高1

00m以下、標高差50m未満の超低山23座、および縦走5コースを、ほのぼのとしたイラストとエッセイで綴るガイドブックだ。超低山には、富士信仰による「富士塚」、大名庭園である「築山（つきやま）」、「天然の山」の3種類がある。ガイドはきめ細かく、たとえば、自然の急な斜面を山にたとえた「見立ての山」である「西郷山」へは、目黒川沿いの低地から登って登山らしくなるように案内してもらえ。巻末には、「東京の超低山百名山リスト」も載っている。

著者のイラストレーター・画家の中村みつを氏は、中学生時代から登山を開始し、谷川岳や穂高の岩壁を登り、ヒマラヤ・トレッキングなどを行なってきたが、のんびりした山旅も楽しんできた。「のんびり山に陽はのぼる」、「山の絵本」などの著書が多数ある。

超低山の「登山に特別な装備は

なにもいらぬ。あるとすれば、より豊かにしてくれる『想像力』かもしれない」と言うように、著者は、あるときは江戸人になりきり、あるときは「秘密基地」の少年になり切る。平均登山時間が2、3分程度の山を、まるで高山に登るかのように大真面目に案内するところにユーモアが漂う。

著者は歴史に深く思いを馳せ、江戸人に優しい眼差しを注いでいる。本書は、日本人がいかに深く山とつながってきたかという山の文化を再認識させてくれる。当会の同好会「マウンテンカルチャー

『山のマナーノート』発行

科学委員会／自然保護委員会

両委員会では山岳会本部からの委託を受け、A6判20ページの小冊子『山のマナーノート』を発行しました。会員の皆様には「山」本号（7月号）に同封してお届けします。

近年の山でのマナーの低下を危惧し、登山者のマナー向上により安全で楽しい山行に少しでも寄与できればと、科学的視点と自然保護の立場からイラストと写真を駆使し、分かりやすくに努めた自信作です。「山の目」

記念行事、全国の登山口などにあるビクターセンター、山小屋、登山用品店での配布を考えています。会員による初心者山行などでもお使いいただきたいと考えます。

好評のおりには増刷を予定しています。また、英・中・韓国語版の発行、さらに「安全登山ノート」の編集も考えておりますが、資金不足です。企業、個人にかかわらず、寄付のご紹介をいただければ幸いです。

注文、質問などは kagaku@jac.or.jp

クラブ」でも、山の文化探究と称して超低山に登ってきたところである。

日本庭園、落語、茶の湯、俳句など、日本には、対象を別の物になぞらえて表現する「見立て」の文化がある。著者はこの日本的な「見立て」によって、東京アルプス、下町アルプスなどの縦走コースまではの奔放な想像力である。

超低山でも、想像力さえ働かせれば、非日常の世界に入っていくことができる。本書を片手に、東京の超低山で、ゆったりとした時間を過ごしてみたいものだ。また、この本をきっかけとして、全国各地で超低山が見直されることを期待したい。

著者にとって山の本は「心の栄養剤」(『山旅の絵本』)だという。本書は読者の「心の栄養剤」となるのではないだろうか。

(甘楽敦夫)



未完の巡礼 冒険者たち へのオマージュ

神長幹雄著



2018年3月
山と溪谷社
四六判 304頁
1700円+税

『山と溪谷』元編集長・神長幹雄氏による冒険者たちとの交流の記録。本書で取り上げられる冒険者は、植村直己、長谷川恒男、星野道夫、山田昇、河野兵市、小西政継の6人である。

著者は、山と溪谷社に在籍し、長年山岳図書出版に携わってきた。そんな仕事柄、取材を通じて知遇を得た冒険家や登山家の突然の訃報に接することが多かったという。知人であり友人でもあった彼らの死に衝撃を受けながら、取材と想像だけで追悼の原稿を書かねばならない。「現場に行けないことへの諦めにも似た思い」が、著者を冒険者たちの足跡を訪ねる「巡礼」の旅へと向かわせた。

本書において著者は、生前に交流のあった6人の冒険者たちについて、『山と溪谷』との関わりを中

心に事績をたどり、未知の領域に挑み続けた彼らの冒険に対する思いや行動を、深い共感と敬意を込めて描き出している。さらに、家族ら周囲の人々への取材や、地元などゆかりの地を訪れることで、その精神が今もなお受け継がれていることを伝えている。

また、著者は自らの身体をもつて、冒険者それぞれのゆかりの地―その多くは極地など辺境の地―を訪れ、その痕跡を探し、彼らの旅の軌跡をたどっていく。時を経ようやくたどり着いた「巡礼」地の1つ、長谷川恒男の眠るウルタルII峰ベースキャンプの墓の前で手を合わすとき、白く静寂そのものの山々にコーランの哀切のこもった音色が響き渡る。「巡礼」のシ

ーンは切なく美しい。

本書は冒険者ごとに章立てされており、章末には年譜が、巻末には参考文献がある。ほかの著作として、90年代の遭難を扱った『運命の雪稜 高峰に逝った友へのレクイエム』がある。本書読了後は、冒険者自身による著作やノンフィクション作品を手に取り、彼らの生きた時代とその熱い思いに直接触れてほしい。

(井上優美)

図書受入報告(2018年6月)

著者	書名	頁/サイズ	発行者	発行年	寄贈/購入別
小澤観一	会越国境・未開の山 御神楽岳：登山史・文献抄	84p/21cm	小澤観一(私家版)	2018	著者寄贈
上田茂春・和井田一雄(共編)	冬人庵書舎図書目録：林の中の小さな図書館	184p/26cm B・B・C	長湯	2018	編者寄贈
日本山岳会	アルプス縦走(復刻版/ブルーガイドブックス No.17)	172p/21cm	実業之日本社	2018	出版社寄贈
三嶺の森をまわるみんなの会(編)	シカ食事で痛む三嶺の森：再生への途と課題	106p/30cm	三嶺の森をまわるみんなの会	2017	発行者寄贈
大倉崇裕	琴乃木山荘の不思議事件簿	270p/20cm	山と溪谷社	2018	出版社寄贈
大島亮吉	山：大島亮吉紀行集(ヤマケイ文庫)	358p/15cm	山と溪谷社	2018	出版社寄贈
鈴木みき	鈴木みきのぐるぐる山想記	128p/21cm	交通新聞社	2018	出版社寄贈
ベルニナ山岳会(編)	BERNINA 69・70号：ベルニナ山岳会創立70周年記念号	320p/26cm	ベルニナ山岳会	2018	発行者寄贈
石川直樹	極北へ：Into The Far North	208p/20cm	毎日新聞出版	2018	著者寄贈

会務報告

平成30年度第3回(6月度)理事会 議事録

日時 平成30年6月13日(水)19時05
分～21時30分

場所 集會室

【出席者】小林会長、重廣・野澤各
副会長、神長・永田・古川・
谷内各常務理事、安井・清
登・星・近藤・波多野各理
事、平井・石川各監事(所
用のため平井監事は審議
事項2まで、近藤理事は業
務執行報告6まで欠席)

【欠席者】中山副会長、齋藤理事
【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・上高地山岳研究所受水槽更新
工事について

上高地山岳研究所受水槽の劣化
に伴う更新工事について審議した。
(賛成11名、反対なしで承認)

2・寄付受入の承認について

寄付受入および管理規程第3条
2により東海支部への寄付金10
0万円の受け入れについて審議し
た。(賛成11名、反対なしで承認)

3・支部長の交代について

熊本支部長の交代について審議
した。新支部長 中林暉幸(No.14
305) (事由) 松本莞爾支部長
からの交代による就任。(賛成11
名、反対なしで承認)

【業務執行報告】

1・入会希望者16名、準会員入会
希望者11名について入会承認を行
なったとの報告があった。(小林)

2・寄付金3件の受領について報
告があった。(古川)

3・「ランタンプラン活動報告会」
への名義後援申請についてこれを
許可したとの報告があった。(谷
内)

4・同好会「ユースクラブOB会」
の設立申請に対しこれを承認した

との報告があった。(谷内)

5・第5回記念事業委員会の開催状況について報告があった。(重廣)

6・賠償責任保険の更新について報告があった。(永田)

7・包括保険制度の導入について報告があった。(永田)

8・チャムラン西稜への青年部遠征隊派遣について報告があった。(野澤)

9・国土地理院ワーキンググループの活動について報告があった。(安井)

10・自然保護全国集会の開催について報告があった。(谷内)

11・平成30年度通常総会葉書の返信状況について報告があった。(谷内)

12・平成30年度会費滞納除籍対象者について報告があった。(谷内)

13・登山計画書の提出状況について報告があった。(永田)

14・「山」6月号の発行について報告があった。(神長・節田)

【今後の予定】

1・常務理事会・理事会

・平成30年度7月度常務理事会

7月3日(火)18時30分 集会室

・平成30年度7月度理事会 7月11日(水)19時00分 集会室

2・平成30年度通常総会 6月23日(土)14時00分 主婦会館プラザエフ

3・平成30年度同好会連絡会議 7月2日(月)18時30分 20時30分 104号室

・自然保護全国集会(石川支部) 7月8日(日) 9日(月) 石川県能美市・白山市

・第34回全国支部懇談会(北海道支部) 7月21日(土) 22日(日) 北海道上川郡上川町層雲峡温泉

ルーム日誌 6月

4日 総務委員会

5日 科学委員会 スケッチクラブ

6日 常務理事会 山行委員会

7日 図書委員会 YOUTH CLUB

8日 YOUTH CLUB

11日 遭難対策委員会 自然保護委員会 スキークラブ

12日 山岳研究所運営委員 「山の日」事業委員会 フォトクラブ スケッチクラブ

13日 理事会 休山会 山想倶楽部

14日 支部事業委員会 山岳地理クラブ 九五会

15日 国土地理院WG

16日 山の自然学研究会 自然保護委員会

18日 総務委員会 資料映像委員会

19日 スキークラブ 里山歴史研究会

20日 YOUTH CLUB 三水会 つくも会

21日 会報編集委員会 科学委員会 みちのり山の会 緑爽会

22日 総務委員会 財務委員会

25日 科学委員会 青年部 YOUTH CLUB 緑爽会

26日 デジタルメディア委員会 遭難対策委員会 平日クラブ

27日 家族登山普及委員会 麗山会

28日 総務委員会 科学委員会

29日 公益法人運営委員会 学生部 01会 山遊会

30日 YOUTH CLUB 土曜会

6月来室者 528名

会員異動

物故

大塚博美 (3514) 18・6・14

小須田喜夫 (3593) 18・6・3

近藤 孝 (4244) 18・6・1

船木 匡 (5266) 18・4・27

石川紀美 (7153) 18・5・30

田中節子 (8690) 18・6・13

大山恭司 (11824) 18・6・7

西川元禧 (11916) 18・6・25

退会

望月雅郎 (3450) 山梨



大阪市立大学	(5127)	関西
猪股鎮夫	(8565)	山梨
渡辺広徳	(9207)	神奈川
平井 泰	(9285)	静岡
大塚玲子	(9610)	
橋本 武	(10069)	
中島雄三	(10980)	山梨
井上千夏	(11265)	
市川克己	(12361)	東海
岩出好晃	(12494)	東海
佐藤 建	(12702)	広島
金子文宜	(12890)	
山田 誠	(13509)	
北 栄一郎	(13621)	
内山功一	(13687)	
阿部興二	(14136)	山形
井上 厚	(14153)	広島
吉田之彦	(14778)	
乾 靖	(14880)	福井
二俣勝美	(15018)	東海
三戸部亜希子	(15354)	
瀬沼信一	(15386)	東京多摩
松永美津子	(15626)	東京多摩
古川征夫	(15751)	越後
秋本義章	(16266)	東京多摩

I N F
O R M

インフォメーション

A T I
O N

◆南アルプス・聖平から三伏峠

山行委員会

南アルプス縦走シリーズ第5回は、聖平から三伏峠へ縦走します。
日程 9月13日(木)前泊〜9月18日(火)プラス予備日1日
集合 13日午後6時 龍泉閣フロント

行程

龍泉閣―易老渡―聖平小屋
(泊)―聖岳―大沢岳―百間洞山の家(泊)―赤石岳―荒川中岳避難小屋(泊)―大日影山―三伏峠小屋(泊)―鳥倉林道―伊那大島駅(解散)

解散

9月18日11時ころ

参加費

5万3000円

募集

10名

申込み

8月20日までに菊池武昭

へ TEL 090-6319-7602

✉ sanko@jac.or.jp

詳細案内はホームページを参照。

◆秋の徳本峠越え

山研運営委員会

秋の徳本峠越えに参加しませんか。山研に1泊して翌日、上高地から徳本峠を越えて島々へ下ります。
日程 9月29日(土)〜30日(日)
集合 9月29日(土)15時までに上高地山岳研究所

行動

9月30日(日)早朝出発、徳本峠―島々(現地解散・30日の昼食は各自行動食を持参のこと)

費用

8000円(1泊2食、傷害保険料含む)

定員

20名(先着順)

申込み

8月31日(金)までに柴山信夫へ。

連絡先

携帯090-8331-4212

✉ jac-sanken@jac.or.jp

*申込み者に詳細案内を送ります。

◆編集後記◆

●6月末、日光白根山登山の前日、中禅寺湖畔の英国大使館別荘記念公園を見学しました。吉永小百合さんが登場する、JR東日本の駅貼り大判ポスターで有名になり、大変なにぎわいぶりでした。

●英国の外交官アーネスト・サトウが明治29年に建てた山荘が前身で、湖水地方をこよなく愛したイギリスを代表するロマン派の詩人W・ワーズワースの世界をイメージして、この地を選んだそうです。かのイザベラ・バードも滞在しており、サトウの次男、武田久吉博士の遺品である書棚と机も展示されていました。博士の晩年に、原稿をいただくためにご自宅にお邪魔し、聲咳に接したことは、大変貴重な時間だったと、思い返しているところです。(節田重節)

日本山岳会会報 山 878号

2018年(平成30年)7月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 小林政志
編集人 節田重節
Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社